九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Power of Communication: Shintai, Kotoba no Chikara

中村, テーマ
九州大学留学生センター ： 非常勤講師

宇佐美, 陽一
崇城大学芸術学部 ： 教授

新部, 健太郎
舞踏家

https://doi.org/10.15017/4777985

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 22, pp.11-23, 2014-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2014，第22号，11－23
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2014, No.22, 11-23

Power of Communication: Shintai, Kotoba no Chikara

Tamah Nakamura, Yoichi Usami, Kentarou Niibe

中　村　テーマ*

宇佐美　陽　一**

新　部　健太郎***

Introduction

Tamah Nakamura ／中村テーマ

The following three workshops were held over a period of one and a half years in collaboration with the following diverse movement practitioners.

Tamah Nakamura: A practitioner in dance and somatic movement education, my Ph. D. dissertation is on Butoh as a form of social identity creation. I spent three years actively participating as a member of the group in Butoh workshops, post workshop discussions, overnight retreats and other activities reflecting an awareness of my personal aesthetic values in body movement, and experiential learning.

Yoichi Usami: I have lived in Germany for 10 years where I studied and performed Eurythmy over 300 times. I compose contemporary music, and direct children's performances. For over 15 years I have been holding Eurythmy-based workshops for children's education. I am a member of the following associations: German Music Copyright Assoc.; Japan Children's Assoc.; honey-bees-art's.

Chiharu Yamaguchi: I am a butoh dancer based in Fukuoka. I have also performed butoh in Tokyo, Taiwan and New York. I collaborate in live-action performances with musicians, painters, photographers, visual media, and other types of artists.

Niibe Kentarou: Born in Hokkaido, 1977, dancer and teacher of Chinese martial arts "Baguazhang" in

*九州大学留学生センター非常勤講師
**崇城大学芸術学部教授
***舞踏家

Fukuoka. Has performed in many dance stages with live music.

The purpose of our collaboration was:

To experience the interconnection of sound, words and rhythm (movement). Using Basho's haiku 'frog in a pond' in both Japanese and English, the workshop and performance explored themes such as: Words as sounds, Movement as unifying, Intuition as sensing ambiguity and 'atmosphere' (reading the air – 空気を読む). The West Meets East workshop incorporated a further theme of experiencing our movements in daily life through the mediums of Eurythmy (German movement modality) and Chinese martial arts.

1. Workshop – November 12, 2011
   "Power of Communication"
   Kyushu University International Center Hall

2. Performance – November 19, 2011
   "Power of Communication Shintai, Kotoba no Chikara"
   YUME-R, Ohashi – an informal, city-sponsered space

3. Workshop – June 16, 2012
   "West Meets East"
   Kyushu University International Center Hall
   June 16, 2012, 13:00-16:00

The following reports by Yoichi Usami and Kentarou Niibe describe the workshops and performance. In closing, Tamah Nakamura shares both audience and student reflections.

~~~~~~

総合芸術的な方法としての
ワークショップと鑑賞

Yoichi Usami ／宇佐美陽一

○　はじめに

ワークショップと言う方法は、様々な分野で重要な役割を果たせるようになってきた。建築や広告
~~~~~~

においてのコンセンサス決定や共同作業の枠として、異分野の出会いや交流など、今ではワークショップの定義自体が難しくなってきているほどである。

これだけ拡張されてきたワークショップを、逆に内容的には多分野による総合芸術表現として、対象者も参加者自身に加え鑑賞者をも受け入れる形として実施することは可能だろうか？

自分の中で反芻している疑問や希望は条件が揃った時に一気に可能になっていく。今回の「音、言葉、動き」では、前回までと同様に九州大学留学生センターの７名の留学生に加え、ワークショップを公共施設のホールを使用することによって、鑑賞の対象にできた。さらに、その観客が偶然にも幼児から大人までの幅広い年齢層になったことと、「ピラティス」という芸術表現ではない分野のワークショップまでが同時開催されたことも、全体を大きくしてくれた要因である。

1　身体を使った芸術表現に関わるワークショップの諸形態

自分自身が行なっているワークショップは次のように分けることができる。

A　遊び（表現以前）：

もちろんこどもの遊びが元型だが、大人もとても楽しめるのは元々人間存在の根底に遊ぶ衝動がある（シラー「Spieltrieb」）からだろう。遊びにはルールがあり、その中の自由を楽しむ。

前回の筑紫女学園大学生涯学習講座での「はないちもんめ」

B　物語り（演劇表現）

ある事実が空間と時間の中で展開されていく物語性は、昔話、メルヘン、小説などの文学の世界を身体表現していくならば、演劇となっていく。「ナラティヴ・アプローチ」という概念で、心理療法や医学、社会学などにも広がりつつある。

C　言葉（詩的表現）

詩は文学の中でも特に日常的な時空間から離れて、よりイメージやファンタジーの中に入っていくので、抽象性や象徴性の高い世界を創る。従来は朗唱、朗読のような表現形式をとっている。しかし芸術性を高める中で「能楽」のように、総合芸術といえるものもある。

D　歌（音楽表現）

上記の詩的表現に音楽的な要素が加えられたり、メロディーが作曲されたりしているものが歌と

言えるが、この場合の言葉と音楽は不可分であり、歴史的には始めに歌ありきとも言える。

E　身体表現（オイリュトミー）

広義のリズムをあらゆる芸術表現の共通項として捉え、そのリズムを身体表現にまで高めようとするのがオイリュトミーである。

この他に、なにかの技術修得などをしていくプロセスにワークショップ形式を取り入れることはとても多い。一般的にカルチャーセンターで行なわれているものは多くがワークショップであり、近年はまだ多くはないが、大学の授業も従来の講義からワークショップ形式になってきている。

2　本ワークショップ「身体、言葉の力」での実際

中村テーマ教授と舞踏家・山口千春氏の三人の共同企画／出演で行なった。

2011年11月19日（土）19：00 ～ 20：30
ゆめアール　大橋　福岡市南区大橋１－３－25
同時開催：ピラティス・ワークショップ　16：00 ～ 17：00

チラシには、「performance The Power of Communication」と入れたが、内容が多様性に富み、一体何を観に行くのかがわかり難かった。

また全体のモティーフとして以下の文章も入れてみた。

「身近でありながら謎に包まれた「身体」の多様な在り方を
観る、楽しむ、感じることができたらと思います」

ここに今回の催しの全体が見事に表現されてはいるが、観客の立場からは何が観れるのかはまだ良くわからない。

プログラム：

1	詩的即興	山口千春＋中村テーマ＋宇佐美陽一
2	舞踏「髑髏の伝言」	山口千春
3	俳句、響き、動きと直感の試み	九州大学の留学生７名
4	オイリュトミー「オンディーヌ」	宇佐美陽一
	「悲しい鳥たち」	
	「亡き王女のためのパヴァーヌ」	
	以上、モーリス・ラベルのピアノ曲（CD 演奏）	

プログラム順に、上記の分類に従いながら詳述する。

尚、ピラティス・ワークショップもこのプログラムの前に行なわれたが、これは上記の分類では追記した分で、ピラティスという肉体鍛錬の方法を動きながら解説していくワークショップに当たり、参加者の「体験」が中心となっていて、一般的な講習方法として良く行なわれている。

1　詩的即興

以前のあるパーティーの余興で、３人は即興を試みている。当時はとても大まかな全体の流れだけを打ち合わせて、中村テーマ教授は声（言葉）、山口千春氏は動き（舞踏）、宇佐美は音（フルート演奏）を主に担当していた。

今回は前回の役割分担を踏まえて、共通のテーマによる詩を日本語、英語、ドイツ語で選び、それぞれの原詩のまま朗唱した。そして、前回のような時間の流れを大まかに捉えずに、各人が自分の担当する詩を何度通して朗唱するかを決めることとした。回数は長い英語の詩（中村教授）は３回、短いドイツ語の詩（宇佐美）は10回とし、日本語の詩（山口氏）は１回とするかわりに動きに専念することとした。そうすることで各人のパフォーマンスの時間的枠がほぼ統一されると予想したからである。

共通のテーマは「聴く　眠る　静けさ」であった。それは留学生のパフォーマンスに使った松尾芭蕉の「古池や　かわずとびこむ　水の音」から本プログラム全体のモティーフを導き出したことによる。３人の対話からこのテーマが生まれるとすぐに詩の選定ができた。以下の各詩を紹介する。

英　　語：Stopping by a Woods on a Snowy Evening　by Robert Frost
ドイツ語：Wanderer’s Nacht Lied　von Wolfgang von Goethe
日 本 語：名残のばら（庭の千草の曲による）志村建世　訳詞

リハーサルは当日の本番直前に一度だけだったが、約30分弱の時間感覚もほぼ共有できて本番に望んだ。

この詩的即興は上記の分類では詩的表現（C）に当たるだろう。共通モティーフを動きに変えて空気感を創りだし、各詩の言語性と言葉の具体性を背景として動き、朗唱していった。

即興のパフォーマンスではこの空気感の形成が行為全体の出来不出来を大きく左右する。前回の経験もあり、舞台人資質としての前提にも信頼関係のある３人にとっては、空気感形成はそれほど時間のかかることではなく、幕の袖でイリを確認して舞台空間に入った時点で、空気感は存在していたように思う。

３人が選んだ詩の共通テーマ「聴く　眠る　静けさ」によって、各人の動きも受動的積極性と

いった、五感の中では聴覚と触覚の役割が中心の緩慢でありながらも力強いものとなった。

物語（B）との関連も指摘できる。しかし演劇のように明らかな時間的ドラマ性に導いていくようなものではない。演技者の心的イメージの中に即興を進行させるための時間軸があり、それはナラティヴなものになって物語を形成していく。それに加えて各鑑賞者の心的イメージにも時間軸があって、詩的表現であるが故に存在する抽象性と象徴性が鑑賞者に働きかけた結果としてのイメージは反って積極的なイメージを物語として編んでいっただろう。

それら総てのナラティヴなイメージは共通の空気感を持ちながらも、同じものはひとつとない。ここに「即興」の醍醐味がある。

2　舞踏「髑髏の伝言」　　山口　千春

このプログラムへの多くの感想に「とっても不思議な人に感じた、千春さんってどんな人なんです？」とある。ここにほぼ集約された形で舞踏の本質が語られているように思う。身体そのものが詩や音楽のイメージであり、舞台で動いていきながらそれを物語に紡いでいくことになる。山口氏はバックグラウンド音楽を使ったりしていたが、それは最終的には必要ではないだろう。また、舞台美術もその後の留学生のパフォーマンスのための布が既に置いてあるが、彼女の舞踏内容にはさほど大きな影響はない。

つまり山口氏の舞踏においては、心的イメージも含めて総合的な表現内容が身体それ自体とその動きの中に集約されていく。作曲家が音符を詩人が文字を使うように、彼女は道具として身体とその動きを使うと言える。

そうすれば分類としては、A　遊び（表現以前）、B　物語り（演劇表現）、C　言葉（詩的表現）、D　歌（音楽表現）の総てが含まれており、その表現が身体性を舞台時空として現れていく。

3　俳句、響き、動きと直感の試み　　九州大学の留学生７名

中村テーマ教授が九州大学留学生センターで担当する「Kyushu University Japan in Today's World program students.」の受講生に、11月初旬に３人でワークショップを行なった。2010年にも行なったが、当時は「はなの橋」という数ページにもわたる物語を題材に、英語と日本語を使っての体験に重点を置いた内容だった。中村教授は事前に数回にわたり、英語での朗唱や動きを留学生に演出して準備し、宇佐美も他大学で持っていた「パフォーマンスアート実習」の日本人受講生に演出し

た作品を持って参加した。

今回は１回のワークショップで創り上げて、外部発表まですることが前提であったので、俳句を題材にして日本語と英語の朗唱（C）や演劇的な表現（B)、それにオイリュトミー的な動き（D）を試みてみた。

俳句は海外でもかなり親しまれ、各国語での作句も盛んである。宇佐美はドイツ語圏での10年の活動の中で、俳句を舞台作品にすることも多く、一度はヴァルドルフ学校でも９年生（日本での中学３年生）の授業をしたことがある。わずか17文字の表現なので、日本がわからなくても英訳によって外国人にも充分イメージできるし、それは物語性よりも時間性にあまり縛られない一幅の水墨画のようなイメージだろう。

そこで彼らとのワークショップでは、ひとりひとりの俳句による個的な体験を大切にしてみた。その上で日本語の呼吸に自然な詠み方を練習したり、小さな楽器を用意して一連の音や響きの流れを創作していった。また、俳句のイメージを各々の母国語で会話したりして行くことで、ひとつの絵画的なイメージを多様な芸術的表現で試していった。

4　オイリュトミー：ラベルのピアノ曲（CD 演奏）　宇佐美陽一

「オンディーヌ、悲しい鳥たち、亡き王女のためのパヴァーヌ」

ここではオイリュトミー表現（D）をした。オイリュトミーでは音楽や言葉の要素に300近い型があり、それをパフォーマーが芸術的に組み合わせて踊っていく。今回は音楽作品としての上演で、かなり純粋な音楽要素の型を用い、衣裳にそれぞれの内容を盛り込んでいった。その中でも、はじめの２曲は文学的要素も取り入れて、水の精や鳥だとわかるような身体表現も少し取り入れた。

3 「祭り」という総合芸術表現：

今回の催しが「表現者と鑑賞者が全体を享受するワークショップ形態」として捉えられるとすれば、それは祭り（フェスティヴァル）である。表現者＝鑑賞者はある意味では幸福な状態であり、しかも表現も様々なレベルである。そこには批評性はあまりなく、まさにお祭り騒ぎ的になっている。

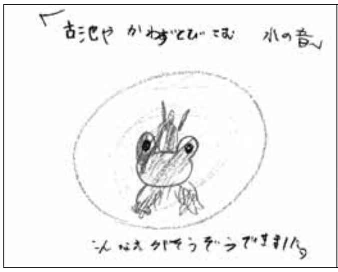
しかし、現代美術における「社会彫刻」の提唱者ヨーゼフ・ボイスの言うように「万人は芸術家だ」という観点で祭り的なワークショップを捉えてみるならば、そこには新しい未来的な事が見えてくるであろう。東日本大震災、いわゆる3.11以後の表現の可能性を考える時にも、今回の「祭り」がかなりのキーワードになっていくだろうし、オイリュトミー創始者のルドルフ・シュタイナーによれば、それは「社会芸術」と呼ばれており、次世代の芸術形態として考えられていた。

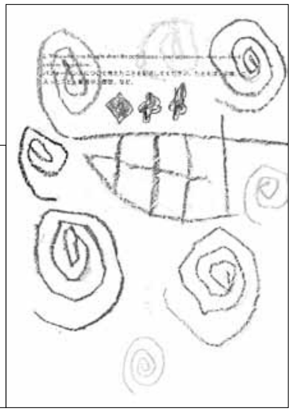
4 今後の可能性

21世紀に入り、「インスタレーション」と「パフォーマンス」が大きな表現分野となってきており、さらには「ランドアート」、「リレーショナルアート」などといった新しい分野が名付けられるに至っている。これらを大きな流れで捉えれば、前述のシュタイナーの「社会芸術」の領域にすべて含まれていくように思える。今後もこの観点からワークショップを実践していきたいと願う。

追記）

休憩時間と終了後に参加者アンケートをとった。自由度の高いアンケートにして、クレヨンや色鉛筆を準備しておいたが、このようにこどもたちが楽しんで描いてくれた。





~~~~~~
~~~~~~

West meets East
模倣をテーマとしたワークショップと鑑賞

Kentarou Niibe ／新部　健太郎

1．日　時：2012年（平成24年）６月16日　13：00 ～ 16：00
2．場　所：九州大学留学生センター
3．参加者：学生４名　講師：中村テーマ／宇佐美陽一／新部健太郎

〇ワークショップの流れ
1．初めに宇佐美先生が「模倣」をテーマとした、「オイリュトミー」に基づくワークを担当。
2．次に新部が「模倣」のテーマを受けて、「中国武術（太極拳）」に基づくワークを担当。
3．休憩を挟み、宇佐美先生と新部とで、「オイリュトミー」及び「舞踏」のパフォーマンスを披露。
4．簡単な質疑応答をはさみ、新部による「易」の実技披露。

１．オイリュトミー・ワークショップ

まず初めに「オイリュトミー」に基づくワークを僕自身が体験。学生と組になり、鏡写しのように相手を模倣して動くということを行なう。次に模倣される側、する側が、合図をきっかけに、第三者から見ると全く主客の変化がわからないように入れ替わるという事を行なう。実際にこのワークを体験してみると、当事者の僕自身が、模倣される側、する側、主客どちらの側に居るのか、柔らかく浸透した、一種不思議な意識感覚を経験。

２．タイチー（太極）・ワークショップ

次に「模倣」のテーマを受けて、「中国武術」に基づくワークを指導。僕からは「重さの模倣」をテーマとして提示した。

まず最初にしっかりと自身の体重を支えられるよう、足幅を広くとってもらう。次に上半身のみ前方へ脱力し（足及び脚は、その上半身を受け止めて立つ）、地面に身体を投げ出すような体勢を作ってもらう。

初めにその身体を支えている足の裏にかかる「重さ」を感じてもらう。次に下半身から順に身体を起こしてもらう（次第に背骨を立てて行く）。まず足の裏から、足首、脛、膝に意識を置く。次に大腿部を起こす際、腰を沈めるよう指示。相撲の四股立ちのような体勢をつくる。次に腰を立て、腹部をおこし、胸を立てる。そして最後に首を起こし、地面から建立した身体に頭部を乗せてもらった。

以上は中国武術における、地面との関係性から、自身の身体の「重さ」を感じる（自覚的になる）

ためのワーク。

次に二人ペアになって、先ほどのワークで自覚した自身の身体の「重さ」を、相手へ伝える事を行なった。このワークは中国武術一般では「推手（すいしゅ）」と言う。ここからワークの主眼は自身の身体の「重さ」を自覚することから、相手の「重さ」を“聴く”事へとシフトする。

幾つかの動作を二人で行なってもらう。その際ルールとして、お互いの手首は触れ合ったまま離さないようにしてもらい、且つ、手首から伝わるお互いの力の比重（重さ）は、均一になるよう注意を払ってもらった。

この「推手」は、各々の身体で表現される動作は異なっていても、身体の内部、ポテンシャルとしての「重さ」を各々で「模倣」するための中国武術における工夫であり、本来「推手」は、武術に於いては相手の体重比を読んで技をかけるための練習技法だったが、今回は視覚情報以外の感覚から、相手の情報を読むことを目的とした。特に各々の身体で表現される動作の個性は異なっていても、「重さ」という別の身体ツール（若しくは回路）を通して、お互いの存在を共有しあう事が目的。

今回、本来は闘争の技法であった中国武術を、コミュニケーションの技法として展開してみた。ワークの最後に中村テーマ先生の提案で、参加者全員が輪になって「推手」を行うという事をした。参加者全員に、笑いや笑顔がこぼれたことに、中国武術のコミュニケーション技法としての可能性を感じた。

3．ダンス・コラボレーション

後半は宇佐美先生との舞踊のコラボレーション。

今回このコラボレーションが大変興味深かったのは、各々の（視覚に映る）身体表現の違いもさることながら、そのフォルムを形作るイマジネーションの持ち方の違いについてだった。実際二人で踊っている現場でも、お互いの踊りが触れあう接触点の違いを感じていたが、後半の座談において話し合った際、宇佐美先生も違いを感じていたという話になった。

僕自身は宇佐美先生の踊りに何か「透明な質感」を感じたのに対し、宇佐美先生は僕の踊りにもっと「具象的な形」を感じたとの事。

確かに僕自身の踊りの基礎には、「武術」というテーマがあるため、とても具象的に目の前に何かをイマジネーションする事が多いし、座談において僕が理解したオイリュトミーにも、僕が感じた「透明な質感」があるという話になった。奇しくも踊り手二人は、一つの場を共有し、目に見えない各々のイマジネーションを肌で感じていた様だった。

この差異が果たして東西のワークの違いによるものか、若しくは個々人の資質の違いによるものか、宇佐美先生とのコラボレーションには、まだまだ興味深い「問い」が隠されているように思えた。

4.「易」閑話休題

最後に僕の武術の流儀が「易」に関係することから、学生の一人を対象として、その問いに対する「易」をたてた。「易」はワークショップの余興という事で、詳述は避けるが、易経の記述には二つのパラレルなイマジネーションがあり、その矛盾の間で、自身の「問い」を深めていく一つの方法であると、学生たちに説明。実際、学生の「問い」に対して、「易」が出した答えは、まんざら的を外したものではなかった。この「易」という方法も、また別の機会に展開できると面白いと感じた。

~~~~~~

Reflections 中村テーマ

The following reflections by viewing audience and students who participated

One audience member wrote:
Gaze, share, distance, space, texture, breath
~~~~~~

France (male)

Kotoba no chikara is the kotoba the body produces as an *expression of feelings.* I felt free and confident to communicate in movement much more than words.

France (male)

Language is a set of symbols. How do we interpret dance or body movement? We have to dance ourselves – to take part in the construction of communication. When we dance together, we 'speak' the same language – *intercommunication and interdependence.* Sometimes creating the same pattern, sometimes creating new patterns.

Taiwan (female)

Body, social manner, external appearance and communication. Boiling heat – every pore was opened. *Soundless information exchange with others.* Instead of study by words, *we 'perform' communication with our mind and body.*

China (female)

Before the workshop, I expected that the performance would be something like a normal pattern dancing with the music. However, it was totally different from my expectation. The freedom in dancing is what I have learned from the workshop. We, JTW students, designed our own show within the theme "The frog leaps in the ponds". We created the sound of fresh morning and the sound of water when the frog leaps in with instruments we have. *We wanted to touch our audience's heart by using sound and movement.* During the real performance, I felt relax and calm as if I was walking in the forest beside the pond in the early morning. *After the performance, I saw a drawing picture of one of the children there. It was the pictures of us while the frog was leaping in the pond and the humans, including me there, sat beside the ponds. As soon as I saw that picture, I realized that our performance can touch her heart successfully.*

American (male)

To be honest, in the beginning I was a little hesitant about what we were doing. After all, I had never done anything like this, let alone act. I found though as I was doing the workshop and *reciting the Haiku that it ended up being surprisingly calming*, and as that happened I got more into the experience of performing and doing a good job at it as well. Of course, when I heard that I actually had to perform it in front of people I was like, what?! Especially since I had been voted, perhaps not so voluntarily, the frog. But I decided to take that feeling with a grain of salt and to have fun with it and make a good experience in the end. And it really was fun at the performance.

Feedback comments will be discussed in connection to workshop themes and objectives in the final

remarks section.

Final Remarks

The theme of our workshops and performances was focused on the power of communication: shintai, kotoba no chikara. Workshop and performance objectives were to experience the interconnection of sound, words and rhythm (movement), that is, words as sounds, movement as unifying, intuition as sensing ambiguity and 'atmosphere'. An additional element incorporated a further theme of experiencing our movements in daily life through various cultural movement modalities.

Key words and phrases from the students who participated in their feedback reflections are calming, silence, expression of feelings, intercommunication, interdependence, soundless information exchange, 'perform' communication with body, touch others' hearts through sound and movement.

It is clear from the students' experience that communication is happening at the somatic/feeling level. Communication is happening in "silence", that is, the words are unspoken and sensory stemming from the energy interaction through the body's sense of meaning in performing interaction with other bodies.

Research focus has been on educational aspects of the power of communication through body, sound, rhythm so the students' experience have been the prime focus when looking at outcomes. Next steps in the instructors' collaborative research will be to focus more specifically on the intercultural/cross cultural aspects of these workshop and performance interactions. Specific areas of analysis that should be considered are both the various students' home country background communication styles, as well as the instructors' cultural backgrounds and movement modality differences/similarities and what emerges from their collaborative movement.